

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用

松 村 恒

一 『三宝感応要略録』の意義の再評価

『三宝感応要略録』は仏教の功德靈験を項目別に配列した説教話集成本である。漢文で書かれたものではあったが、我が国の仏教説話文学にも多大の影響を与えた。遼の非濁の撰になるものというが、中国や韓半島の史書や記録類には同書に関する記載は見られず、もっぱら日本にのみ伝持されてきたという。従って前近代の利用はもっぱら日本古典文学にのみ見られ、また近代以降の古典文学研究も日本の研究者のみによって研究され続けてきた。しかも出典研究上の一資料としての視点が強かった。

近年日本に留学した中国人学者である李銘敬博士によって『三宝』が研究の中心課題に据えられ、従来見落とされていた点など多々論究し、様々な修正案を提示した成果を生み出した。⁽¹⁾種々な成果のうちでもとりわけ重要なのは、その構成についてである。これまで『三宝』は『今昔物語集』との関

連で論じられることが多かった。両文献が物語を共有している場合には、後者が前者の書き下しであるかのような印象を与えるほど、本文に関しては密接な関係があった。『今昔』は多数の物語を含んではいるものの、その配列には一定の方式があり、学者により〈二話一類方式〉と名付けられていた。この配列方式は直接連続する物語同士のみと言われるのではなく、またその組を構成してゆく章全体にまで及び、また文献全体を構成する章の配列にまで関わるものである。『今昔』は生き物のように有機的な構成を採っていることは驚くべきことでもあった。

この〈二話一類方式〉から逆算して、『今昔』と緊密な関係（部分的に）持つ『三宝』にも、その配列方式が見られるのではないかと思われがちであった。しかしそれは『今昔』の構成の見事に多少目眩ましを受けた感がないでもない。そうした日本の伝統からは自由な立場にあった李博士はテクストそのものを虚心坦懐に分析して、その構成に関して独自

の見解を打ち立てた。

二 李博士の斬新な構成分析

『三宝』所収の各話を〈二話一類方式〉で切つてゆくと、うまくゆく箇所もあるが、またそうでないところもある。かつて筆者自身もこの作業を試み、うまくゆかないところも強引に切つて附会牽強な理由付けをしてみたが、これは結論が先行していた誤った所行であつた。李博士の結論を簡単に摘記すると次の様になる。

上巻…諸仏Ⅱ一〇釈迦 一一〇阿弥陀 一二阿闍 二二
 二八薬師 ……
 中巻…諸経Ⅱ一七華嚴 八〇一二阿含 一二阿毘達磨藏 一三
 一四律藏 ……
 下巻…諸菩薩Ⅱ一六文殊 七〇一〇普賢 一一一四弥勒
 一五三〇観音 ……

各巻各項目は整然とした構成を採っており、項目内の話数は一定しないものの、無理矢理二話ずつに切つてゆくよりも、ずっと自然ですつきりとした区分けであり、基本的には賛意を表明したい。⁽²⁾しかし二話一類の要素を完全に切り捨てるわけにはゆかない。二話一類は『今昔』からの逆算から見られるばかりでなく、『三宝』の材源から受け継がれた場合もある。この伝承の筋道を求めることは大事である(三・四節参照)。

『三灵感応要略録』の構成と後続文献のその利用(松村)

三 李博士の分類への若干の疑問点

三・一 三宝の意味

上中下それぞれの巻への霊像感応・尊経感応・菩薩感応の配当は巻上の冒頭の序にも述べられている通りである。そしてそれが仏宝・法宝・僧宝を意味して全体の書題である三灵感応に呼応することも言われている。しかし三つの項目のうち初めの二つは問題ないが、菩薩Ⅱ僧宝の配当には疑問が残る。初期の大乘仏教では修行者を菩薩と呼ぶことはあるので、その意味ではこの配当は全く不可能というわけではない。しかし李博士の下位項目を見ると、文殊・普賢・弥勒・観音：とあり、霊像感応と繋がるものとなる。この項には高僧伝に取材したものもあるので、編者の意図はそのあたりにあったのかもしれないが、三宝の僧は個々の僧侶というよりは、僧団(サンガ)を意味しているので、このあたりをもう少し詰めないで、全体の三宝の持つ意味との連携が緊密にならない憾みがある。

これは偶然かもしれないが、李博士の訓読にはこの序の部分は省かれている。序の持つ意味をあまり重視されなかったのであろうか。いずれにしても序文の意味の再検討は必要である。

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用（松村）

三・二 經典名による区分け

中巻は經典に関する部分であるが、三十七話以下の箇所を再考してみよう。

方等	寿命經	童兒聞寿命經延寿感応第三十七
	般若心經	焉耆国王女誦般若經感応第三十八 畢試国王写誦般若心經除怨害等感応三十九 遍学三藏首途西域毎日誦般若心經三七遍感応第四十

三十七話と三十八話は劃然と分けられているが、三十七話は僧坊に寄宿した童兒が寿命經を聞いて寿命を延長できたという筋。三十八話は疫病で一旦は死んだ胎兒が母親の般若心經により復命したという筋。いずれも經卷供養（聽聞・誦誦）により命を得たということで一類を成すと見ることは可能である。関係している經典が違ふということで別枠に分類されたのであろうが、ここである寿命經というのが必ずしも明らかではない。⁽³⁾ 特定の固有名詞であるというよりは、寿命を延ばす御利益のあるお經といった一般的な呼称かもしれない。そうであれば、上の表の枠組みは変更することも可能であろう。

また個々の經典の上の区分けとして天台の五時教判の分類に倣って「方等」を設定し、この両者をそこに入れているが、それも疑問である。というのも上表の直後の四十一話以降は

般若經類が連続して出現するので、五時の次の項目である般若という部類が立てられているからである。般若心經であれば般若の部類に入れるのが普通であるが、一括して扱いたいという事情もある。つまり三十七話と三十八話の連繫を考えると、三十七話を方等に配し、三十八話を般若に区分けすることには確かに困難が感じられるからである。⁽⁴⁾

三・三 寿命を延ばす説話

寿命を延ばす物語は他にもある。すなわち三十三話は薬師經の書写により寿命を延ばした物語である。『今昔』六―四七はこれを承けたものであるが、一つ前の三十二話を六―四六に承けて連続させている。そして『三宝』では少し先に飛ぶことになる三十七話を六―四八に承けて連鎖を構成している。

三宝	今昔
三十二	六―四六
三十三	六―四七
三十七	六―四八

三・四 『雜宝藏經』を援用すると

ところで寿命を延ばす説話は『三宝』上巻の終わりあたり集中的に現れる。すなわち四十四話・四十八話・四十九話・五十話がそれである。特に四十九話と五十話はどちらも寺を補修したということで、話順も連続しており、この二話を一

類と見なせる根拠はある。⁽⁵⁾ さてこの二話の材源を求めてみると、それぞれ『雜宝藏經』(四六)(四五)となり、順序は逆ではあるが、連続している。つまり材源でも一類として扱われていたのである。両者の本文を対照させてみると、『三宝』のこの二話の表現は、殆ど『雜宝』にトレースできるので、後者を前者の直接の材源と見なすことに不都合はない。

三宝感応要略録	雜宝藏經
比丘補寺壁孔延寿感応第四十九 出雜宝藏 昔有一比丘、死時將至、因入僧伽藍、見壁有孔、即便团泥而補塞之、增其寿命矣。 昔金地国王治古寺延寿感応第五十 出譬喻經 昔有相師、占金地国王却後七日必当命終。後日遊獵次、見一故寺破壞、即生悲心、速修治之、得三十年寿命矣。	(四六) 比丘補寺壁孔獲延命報緣 昔有比丘 死時將至…因入僧坊 見壁有孔 即便团泥而補塞之…增其寿命 (四五) 乾陀衛国王治故寺得延命緣 昔一明相師 占王 却後七日必当命終 出遊獵行 見一故塔毀敗崩壞 即令群臣 共修治之…七日安穩

『三宝』は五十話の出典を譬喻經としているが、固有名詞としての経名ではなく、『雜宝藏經』をジャンルで呼んだものである。もしそうであれば、ジャンル名を用いた編者の脳裏には十二部經の『アヴァダーナ』が想定されていたことであろう。⁽⁶⁾ 表の二番目のペアでは物語の舞台である国名には金地国、乾陀衛国と相違があるが、それぞれ suvarṇabhūmi、

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用(松村)

gandharvaで、どちらも想像上の理想的な国ということと共通している。そうした事情から起こった交替であろう。

三・五 目録と本文の標題の齟齬

『三宝』の各巻の冒頭には各話の標題が一括して掲げられている。今日の言い方をすれば目次であるが、この目録標題と本文標題は常に一致しているというわけではない。例えば巻上二十二話では

【目録標題】 天竺婆(羅)門造藥師像得子五十年寿感応(第)廿二⁽⁷⁾

【本文標題】 造藥師形像得子五十年寿感応第廿二

とある。李博士は目録標題の方が長くなっていることに注目して、目録を見ただけで話の内容がわかるように、敷衍して増加表現になっている、と結論づけている。しかし逆に本文標題の方が長くなっている場合もある。巻中からその例を挙げてみよう。

【目録標題】 將説花嚴經以水盥掌水所霑虫類生点感応第一

【本文標題】 有人將説花嚴經以水盥掌水所霑虫類生点感応第一

【目録標題】 諸小乘師以花嚴置阿含下恒在其上感応第二

【本文標題】 毘瑟拏寺小乘師以花嚴置阿含下然恒在其上感応第二

【目録標題】 中印度国講金光明最勝經感応第廿八

【本文標題】 中印度有一中国講金光明最勝經感応第廿八

【目録標題】 釈迦趣菩提樹下時地神奉般若金夾感応第五十

【本文標題】 釈迦從鉢羅笈菩提山趣菩提樹下中路地神奉般若饒感

応第五十感応第二十二

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用(松村)

以上の様な事例があるので、目録標題が内容俯瞰のために長くなっているとは一概には言えない。目録の標題を変更した方がよいという積極的な理由は見いだせない。現時点では、目録作りにあたって綿密に本文標題と照合して整えることはしなかったということしか分からない。

三・六 各話の配列方式

また李博士は説話の配列方式について二三八頁にて「天竺説話が各説話群の最初に置かれている配置方式は明白である」とかなり断定的に述べている。しかし反証が存在する。

勝鬘經感応 第二十二 震旦

第二十三 天竺

大般若經感応

第四十一 震旦

第四十二 震旦

第四十三 震旦

第四十四 天竺

大品般若經感応

第五十一 震旦

第五十二 天竺

以上の例を見れば、天竺から震旦へといった仏教史の時間的な流れに即した配列順ですべてを割り切ることはできない。

四 『法華修法一百座聞書抄』における『三宝感応要略録』の利用

『三宝』には成立直後、割と早い時期に日本に将来され、

以後数々の日本文学に影響を与えている⁽⁸⁾。『今昔』との関係は江戸時代以来論じられることが度々であったが、利用度の尤も大きいものは『三国伝記』であった。しかし一番早い利用は『法華修法一百座聞書抄』である。同書の翻刻とエディションを作成した佐藤亮雄氏は巻末に関連資料を列挙している⁽⁹⁾。その中で『三宝』は二回挙げられている。すなわち

三月九日条 『三宝』上第十八

閏七月十一日条 『三宝』中第三十八

である。前者のペアについては以前言及したことがあるので、⁽¹⁰⁾ここでは省略する。なお池上洵一氏は前者のペアに於いて『三宝』を直接の典故から外し、『百座』による『三宝』の利用は後者のペアの一例だけであるとしている。従ってこのペアは重要な事例となる。特に『百座』の問題の部分は写本の末尾に現れ、破損の状態が甚だしく大きく、欠損部の文言の推定が困難である。残存部分を『三宝』の漢文と比較してもそれ程緊密に相応するわけではないので、漢文は欠損部の文章の再構にはあまり役立たない。池上氏が『三宝』を出典から外した最初のペアの方がまだしも両文献が相応していることは、拙論で対照させたところからも見てとれる。⁽¹¹⁾『三宝』自体に「出経明驗讃記」と出典を記していることから、『百座』がこうした別の文献に依拠したことも考えられるし、また依拠した文献から乖離したりしなかったりについては、口

頭の説教のための自由な取り込みということもあつたらうから、直接の材源か否かという問題にはなかなか決め手が得られない。

ところで『百座』三月一日条中の物語の一つに、十五歳の沙弥がその生命が十八歳までもたないであろうと予見された段がある。その沙弥は次に八十の命があると言われた。寿命が延びた原因は「諸仏両足尊 知法常無性 仏種從縁起 是故説一乗」という偈を聞いて心にとめた功德のためであつた。

これに関連する資料としては既に『法華伝記』巻六第四話（大正五・七三上）が知られている。逐字的に対応するわけではないが、問題の偈が同一であり（法華経方便品のもの）、どちらも法華讃揚の文献であるから、『法華伝記』を材源と考えることに不都合はない。しかし『百座』の編者は『三宝』巻中第三十七話をも念頭に置いていたことであろう。ここでは寿命経というよくわからない経名になっているが、これを法華経方便品と置き換えたら、『法華伝記』とも『三宝』ともよく相応することになる。そして『三宝』ではその直後に続く巻中第三十八話は『百座』と強く関連しているのであるから、『百座』の編者は『三宝』の連続する三十七・三十八話を見ながら、經典の功德による延命を説こうと思ひ、物語はより詳しく語られる『法華伝記』に求めていったという筋道を考えることも可能である。この様に部分的散発的ではあるが

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用（松村）

『三宝』の二話一類は各所に見られ、後続文献にもその影響の跡を残している。

なお中国の非仏教文献である『夷堅志』甲志卷七張仏児にも經典聴聞の功德により蘇生した物語が伝えられているので、中国以来經典の功德の一つに延命があるというのは説教の大きな主題を形成していたのである。

五 おわりに

『三宝感応要略録』は中国での撰述でありながら、その伝承の歴史は専ら日本に於いてのみ見られた。同書が及ぼした文献も例外なく日本文献ということになる。近年翻刻や影印及び訓読と書誌的な作業が続々と完成している。こうしたよい状況の中で、本書の意義を見定める一層の研究を進める時期が到来していると言えよう。

- 1 李銘敬『日本仏教説話集の源流』研究篇、小林保治・李銘敬『同』資料篇（勉誠出版 二〇〇七）。資料篇は『三宝』の尊経閣文庫本の翻刻と訓読から成り、大正蔵の本文や、国訳一切経の訓読を一新した。その後尊経閣文庫本の影印も出版された。尊経閣善本影印集成 四三（八木書店 二〇〇八）。金剛寺本の影印・翻刻・訓読も出されている。『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』（勉誠出版 二〇〇七）。本稿での引用は尊経閣本による。

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用(松村)

2 三〇七—三一七頁に『三宝』の構成表が呈示され一望できて便利である。しかし基本的には、李博士が反論している国東文磨『今昔物語集成成立考』[増補版](早稲田大学出版部 一九六二、増補 一九七八)五七—五九にあるチャートと同じである。両者は大綱は同様の認識に達しているが、強調する部分が異なるということである。

3 『較量寿命経』という題を持つ經典はある。しかし各世界での寿命の長さを述べた世界観を説いた經典なので、あまり功德があるものではなく、仏教説話に採り上げられるものとしては相応しくない。なおこの經典の梵文・藏文・和訳はそれぞれ、“The Āyuparyantasūtra,” *Amalā Prajñā* (Delhi: Sri Satguru Publications, 1989), 61–77; “Āyuparyantasūtra,” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon I* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989), 69–100; 『梵文較量寿命経』[四天王寺国際仏教大学文学部紀要]四〇(一九八二)五九—八一。

4 もし三十七話と三十八話を一括しようとするならば、得体不明瞭な寿命経を般若に入れてしまえばよい。その場合は般若經典の中の寿命に関わるパッセージを意味していると理解することになる。但し国東氏によれば、三十七話に対応する『今昔』六一—四八は三十三話に対応する『今昔』六一—四七と一類を構成することになっている。しかし薬師経信仰という観点からすれば『今昔』六一—四七は『今昔』六一—四六とペアを作ってもよさそうであり、またこの二話に対応する『三宝』の二話は三十三話三十二話と連続している(順序は逆転しているが)。ということは国東氏の提唱する一類というものも、解釈によっては別の組み合わせに成り得る結びつきの弱いものである。

5 線的な流れで隣接するものが組を成すのは了解しやすいが、

離れて配列されていても同一主題を扱うことによって、やはり組を成しているとみなされる。つまり構造は一次的ばかりではなく、二次元的あるいは三次元的になって複雑な様相を呈している。李博士も二三八頁にて「…再分類された説話とは、それぞれ同一主題をもつ基底説話群を形成する」と述べている。基底説話という用語が必ずしも明瞭ではないが、恐らくはこのことを言っているであろう。

6 次を参照。「聖典分類形式としてのアヴァダーナの語義」[インド思想と仏教文化](春秋社 一九九六)二五七—二八七。

7 像」形像 大正・金剛寺・慶安。尊経閣本が「形」の字を書き落とした可能性は高い。

8 包括的な概観として、池上洵一「中世説話文学における『三宝感応要略録』の受容」[三十周年記念論集](神戸大文学部)(一九七九)＝『著作集』一(和泉書院二〇〇一)五五五—五七四が勝れている。

9 佐藤亮雄『百座法談聞書抄』(桜楓社 一九六三)。その後影印・翻刻が出ている。『法華修法一百座聞書抄』(勉誠社文庫四)(一九七六)。

10 “Die Quellen der indischen Erzählungen im Konjakumonogatari-shū,” *Kobe International University Review* 43 (1992), 13–41. 陳如説話の機能的役割の転換」[印仏研]五六—(二〇〇七)一二—一九。前者はドイツでのフォアトラークの原稿を基に改稿したものであり、日本文学専攻の学友に抜刷を送付したが反響は零であった。当時『三宝』と『今昔』の関係の見方は皮相的であり、また二話一類方式に囚われていたので、誠に不十分な内容であった。これらを改めた日本語版を用意したい。

11 前掲論文にてこのペアと更なる関連資料を並べて比較考察し

た。その観察からして、具体的に直接の材源が特定できるまでは、『三宝』を出典の候補からは外せないと思う。

〈キーワード〉 『三宝感応要略録』、二話一類方式、『今昔物語集』、

『法華修法一百座聞書抄』

(大妻女子大学教授・Ph.D.)

『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用(松村)

新刊紹介

能仁 正顕 編

『西域
流沙に響く仏教の調べ』

B 六版・三〇二頁・本体価格二、四〇〇円
自照社出版・二〇一一年八月